

私の稀観本ノート

その34

○詩集 一本のつゆくさ
菊田 守著
椎窓 猛



初秋、ヒガン花が真紅の色を噴きあげた日、東京中野区鷺宮に住まれている詩人、菊田守さん恵贈の詩集『一本のつゆくさ』。雑草のなかでいつもひっそりと、かくれ地蔵のように凜と咲く勁い草、露草——と、帯にあるように、まことに清楚な、まさに露草のような一行一行が美しい露に光っているような、品のある詩集である。一昨年の夏であったか、東京成田のある詩人の会で、菊田さんとはめぐりあった。それから、おりに詩集、便りを載いている。草、虫、雲の流れなどにいとしまれる心情がつつましく描かれていて、魅きつけられる。(花神社刊)

黄櫨の会・自分史図書館だより



平成19年10月10日 筑後市野町428-8
〒833-0032・TEL 0942・53・8122

これは世につたえておきたい
かたっておきたい
わが胸の底から真実のおもい
人生幾山河のめぐりあい
あの日の風やひかり そして空のひとひら
哀歓のかがり火に生きた幾年月の路
「自分史図書館」は その証言館です。

エンマコオロギ 菊田 守
草原で 鳴いている
エンマコオロギが 鳴いている
美しい声で鳴いている
鳴く声美しく
強くなればなるほど
闇のくさむらで鳴く
コオロギの恐ろしい貌が
わたしの胸に迫ってくる
美しい戦慄が身体を走る
秋の夜

○切手と風景印でたどる
百名山
桜田隆範著



「百名山を完登できたら、書き留めてきた記録を整理し、本にしたい」「百名山の書類は多い、そこで色鮮やかな切手と風景印で花の山旅を飾ろうと思ひました」とは著者のまえがき。

1941年(高校時代)に八幡平に登ってから28年目、2006年、100番目の美ヶ原でゴール。

著者は1949年(昭和24)秋田の生まれ。現在、広報通信社代表。囲碁仲

間の谷岡晃さんの協力でこの本ができたとも述べられているが、その谷岡さんとは古いつきあいである。そんなことから桜田さんからも親しく便りをいたゞき、本の恵贈を受けた。有難い縁故である。

九州では、祖母山(平成10)阿蘇山とつづいて登山。「岩の上に咲き残っていた可憐な一輪の lindou に心とみまます」といった感慨が光っている。(ふくろう舎刊)

受贈図書紹介 22

順次紹介していますが受贈日より多少遅れます。あしからずご了承下さい。

夢幻の満州国 …… 国武 唯義 うきは市
ある女教師の軌跡 …… 蒲池 昇子 大野城市
歌集在宅酸素 …… 大坪 公子 東京都
我流随想 …… 原 忠雄 久留米市
歌集生かされて …… 奥本 守 若狭町
39年目の判決 …… 宮永 偉文 筑後市
愛はばたいて …… 野尻千穂子 熊本市

詩集とんぼの空 …… 長野 正 筑後市
愛しき子等へ …… 松本 始 熊本市
詩集風にゆられて …… 丸尾のり子 広川町
歌集水毬 …… 和田 明江 いちき市
セルロイドの下敷 …… / /
MY PHOTO ALBUM …… 江上 賢一 久留米市
どこまでも青い空 …… 中野 政子 福岡市
よーそろ倫敦 …… 中野 洋一 福岡市
わたしの歩いた道 …… 政住 光 筑紫野市
心の子育てバイブル …… 高倉万友美 久留米市



○こだまの響き

浦田 茂

平成元年から「西日本新聞」の“こだま”欄に投稿をはじめられた文章、平成11年までの掲載分を集大成された一冊。著者は小郡在住。交通指導課長、小倉南署長など歴任の警察畑を歩かれた経歴が記されているが、「こだま」への投稿は常に庶民の、地についての暮らしのなかからの発言。例えば、筑後平野の休耕田を見ては、農産物輸入自由化の波を憂え、「緑の田園風景いつまでも…」と希念される。また自転車愛用家としてのベタル踏み体験からの発言も多々で傾聴させられる。

(梓書院刊、私家版)

わが歩む土手に傾き咲ける萩
笹のしげみにあわれなるかな
やうやくに花咲き初めし水仙に
そそぐ小雨は止むときもなし

雪山ゆ吹きくる風は畑打ちて
汗にじみたる背に快し
明朝よりは保育園に通ふ孫と寝て
孫より吾のたかぶりて居り
櫨紅葉映ゆる夕を稲束ね
気負いはげみき十年前まで

(平成五年刊・八十一歳)

農婦の呟き

毛利キヨ子

○教えきし道

高根敏臣

大正11年神奈川県茅ヶ崎市生まれ。横浜高等工業卒、戦時中軍需省軍需管理官として延岡へ。

戦争時のこと。「福岡へ行き、三菱化成の藤岡少尉を訪ねました。彼と話し合い、翌日、社員クラブでご馳走になり、一泊。娘さんがお酌、藤岡少尉に酒を注ぐ手つきが優しかった。何十年か経って彼の家を訪ねたところ、あのとときの娘さんが奥さんでした」といった回顧の記。

終戦後、教師の道へ。理科教師。・地球の半径ろく見なれ=6374Km—といった理科カルタなどの指導体験なども語られている。

(文芸社刊)

○餓鬼の残像

やめがわ 八女川瀬

著者は昭和8年八女郡広川町生まれ。「月刊自動車」などの記者を経て、現代産業科学館技術員を平成11年まで勤務。

内容は「餓鬼の残像」「雪の結晶」「蝙蝠傘」「黄櫨は雌の木」「薬味を添えて」など5篇。

おしまいの章に、「シニア・フレンド」について語られているが、小説を書き、文学賞に応募したことによって、一次審査通過、それを読ませてほしいという人が現われた。その人は同郷、餓鬼仲間の兄ヒョコヒョコついてきていた幼顔が浮かんだという話。この著者の本名は山下賢治さん。

編集掌記

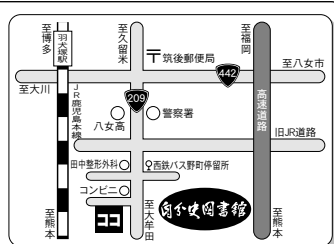
▼団塊の世代の定年退職を期に、ふり帰って自分史を編んでみませんか、自費出版をすゝめる出版社が急速に目立つ昨今である。この手の本を手にして感じるのは、戴いた原稿をそのまま、集録したと見える手あいが少ないようである。たぶん契約金だけはしっかり頂戴ではなからうか。そんな憶測がかすめないでもない。手にとつて、良い本は装幀、ページの組み方がみごとである。編集者のセンスが見えてくる。

▼この号にとりあげた



自分史図書館

入館無料
開館 午前9時～午後5時
閲覧希望の方は予め電話でご確認下さい。
貸し出しはしていません。



〒833-0032 筑後市野町423-8 TEL・FAX 0942-53-8122
西鉄バス野町停留所より徒歩5分
インターネットでもご覧になれます。http://www.jibunshitosyokan

菊田守さんの詩集「一本のつゆくさ」を手にとつてみれば表紙の淡彩な色あい、帯の色にしても実にこまやかな味わいがある。目次の組み方、行間、題字の大きさ、目にやさしく詩が投影してくる。発行人のセンス、構力が汲みとられてくる。出版社の良心が見えてくる。
(自分史図書館長 椎密彦)